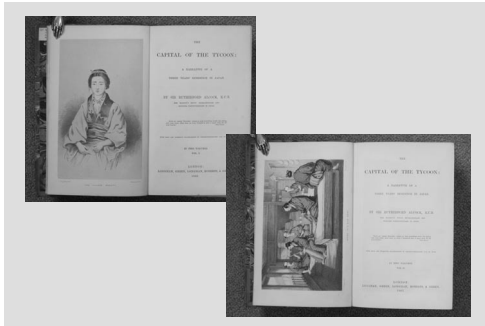


守を副使とする開港延期交渉のための使節団をヨーロッパに派遣しており、この使節一行が国際博覧会の開会式に参加しました。

この年、オールコックは前述の休暇でイギリスへ戻っており、彼が来日間もない頃からこの一時帰国までの3年間に原稿として纏めていた『大君の都』をロンドンで出版しています。従って、こ



“The capital of the tycoon. 2 vols.”  
（『大君の都』）—本学図書館所蔵—

こに書かれたことは第2回ロンドン国際博覧会の開催される前の記述ですが、「わたしは、漆器や磁器や青銅製の見本—それらの多くはひじょうに優良かつ貴重なものである—を集めて、ヨーロッパの最上の細工品と綿密な比較テストにどこまで耐えうのかをしらべるために、大博覧会へおくれた。その結果は、けっして日本人の名誉を傷つけることにはならなかった、と思う。」と日本に対して好意的な予測をしています。

### 日本人の嘆きとヨーロッパ人からの高い評価

ところが、第2回ロンドン国際博覧会に出展された日本の美術工芸品に対するこの日本使節団の印象は大変悪いもので、この使節一行に福澤諭吉らと共に随員として加わっていた淵邊徳蔵は、「欧行日記」に「我が国では博覧会の意味と目的を理解していないので産物を他国に売ることが悦ばず、このような粗末な物だけを出しているのだ。これも全く世界と交流していないからだ」<sup>(1)</sup>という主旨の文章を書き記しています。淵邊のこの感想はオールコックの収集を責めて言うのではなく、寧ろ国際博覧会への出展を了承していながら、国家的な対応ができなかった徳川幕府の消極的な対応を批判しているのです。

しかし、この日本からの展示品についてはオールコックが考えた通り、国際博覧会の見学者から高い評価を得ました。日本の美術工芸品は、16世紀中葉からポルトガルやスペイン、その後、江戸時代初期のイギリス、さらには鎖国体制構築後のオランダとの交易を通してヨーロッパ各地へ流入していたものの、この当時、日本文化の価値を

熟知している人は未だ多くなかったのです。このため、日本人の観点から淵邊が嘆いた「このような粗末な物」であっても、ヨーロッパの人々は異質な文化の中にある日本人の美意識や技術力の高さを大いに称賛したのです。

### オールコックの自負心

この第2回ロンドン国際博覧会の終了後に日本から持ち込まれた美術工芸品はイギリスで売りに出されたといわれています。こうしてヨーロッパに広がった日本製品は日本ブームを巻き起こし、1870年代のロンドンに始まる唯美主義運動に大きな影響を与えることとなります。また、1867（慶応3）年に開かれた第2回パリ博覧会に徳川幕府と薩摩藩、肥前藩が正式に出展したことにより、日本文化はジャポニズムとしてイギリスやフランスだけでなく広くヨーロッパの人たちに一段と強く認識されるようになりました。そして、ヨーロッパは「新しい芸術」としての所謂アール・ヌーヴォーの時代を迎えることとなります。

オールコックが日本で美術工芸品を収集し、『大君の都』でその価値を紹介した時点で、その品々がアール・ヌーヴォー期にまで影響を与えることになるものと考えていたとは思えませんが、第2回ロンドン国際博覧会の終了後16年を経て出版された前述の『日本の美術と工藝』では、ヴィクトリア女王の夫君で博覧会の王立実行委員会総裁であったアルバート公が、イギリス工芸品への日本美術の受容に熱心であることを述べて、イギリス国内での日本熱の高まりを証明しています。

また、オールコックは本書の中で、別人が書いた日本の陶器に関する著書に、「私が日本でていねいに集めたコレクションについての記述がないということを経験として述べなくてはならない」などと不満を表し、自分自身の功績を主張しています。このように、オールコックは終生、ヨーロッパ社会への日本美術品の紹介者としての強い自負心を持ち続けていたのです。

### 註

- (1) 平野繁臣著『国際博覧会歴史事典』169頁  
内山工房 1999年。

### 参考文献

- オールコック著 山口光朔訳『大君の都 幕末日本滞在記』（上、中、下）岩波文庫 1994年。
- ラザフォード・オールコック著 井谷善恵訳『日本の美術と工藝』小学館スクウェア 2003年。
- 吉田光邦編『万国博覧会の研究』思文閣 1986年。

おく まさよし（司書・事務局長兼管理運営課長）